

# 月曜寸言

去る四月四日（清明節）の天安門前広場での大衆「反乱」以来、中国の政治の動きは急速な展開を遂げ、鄧小平・副首相はすべての公職を剥奪されて、わたたくし華国鋒首相が実現した。

それほどまでに、天安門前事件が、いわゆる党中央文革派に与えた衝撃と動揺は大きかったのであるが、今回の天安門前事件は、その性格においても、規模においても、社会主義国家に前例を見ないものである。

今回の事件が深刻であるのは周恩来をしのぶかたちをとりな

から、明らかに毛沢東政治への批判がそこに含意されていたからである。

毛沢東の最初の妻・楊開豊の名を出すことによって、きわめて肅然に江青批判を展開した人びとがあつたことに示されるように、とりわけ毛沢東政治の家

だのであつた。もかく、周恩来の遺影が碑にかけられたとき、大衆のあいだから歓声とインターの合唱が起つたという事実が物語るものは重く深い。つまり彼らは明らかに毛沢東賛歌のかわりにインターをうたうことを自発的に選んだのであつた。

## 毛沢東体制の動揺

やま 尚 確

私は半月まえの前回のこの欄

とはいえ、中国のような国家体制の国において数十万の大衆が一夜のうちに天安門前広場に集まり、ときあたかも「走資派」批判のさなかに、そのうち数万

者があつたことを中国民衆は訴えたかつたのではないかと

で、周恩来葬儀のあとの中国の状況にふれ、「この辺の問題は周恩来を哀悼して全国各地から献げられた花輪が一月一九日を期して天安門前広場から撤去されたこと、『人民日報』ほかの公式紙誌が周恩来追悼の論文や

どをそれ以後掲載していないこととともに、事態の本質に迫る力ガの二つではなからうか。今回の一連の事態のなかには、圧倒的多数の鄧小平批判のなかに一方では周恩来批判、他方では江青批判の疑新聞があつたと云えられたが、この事実は象徴的な意味をもっているように思われてならない。……『走資派』批判の核心はこのあたりにあるような気がする」と書いた。

右のような文脈のなかで一月一九日にすでに今回の天安門前事件と同種の事態が生じていたことを紹介した新聞は、はからずもこの『月曜評論』のみということになつた。

（東京外語大助教授）